



国語（前期）

〔注意〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題は13ページからなる。落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所などがあれば監督者に申し出て、問題冊子の交換を受けること。
3. 監督者の指示に従って、4枚の解答用紙に受験番号および氏名を必ず記入すること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された場所に記入すること。
5. 解答に字数制限のある場合は、句読点を字数に数えること。
6. 解答は、内容とともに、用語、表記、構文にも注意して書くこと。
7. この冊子は持ち帰ること。

— 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。なお、この文章は『フッサール 心は世界にどうつながっているのか』という本の「はじめに」と第一章の一部である。

夕暮れにユルやかな坂道を自転車で下つていくと、目の前に広がる住宅地のそこここに照明が点りはじめ、私は突然気づかされる。これまでに出会ったこともない私以外の人々が、それぞれの住まいのなかでそれぞれの生活を続けていて、私が今持つているような意識をそれぞれ持っているのだと。中学生の頃に確かに体験したに違いない軽い驚きの気分は、たった一度だけのものであつたのか、あるいは幾度も繰り返して起こつたのかは定かではない。しかし私自身の記憶のなかでは、この出来事は、私が世界に対する根本的な問いを立てるときの、強力なベクトルをなすものとして作動し続けている。

私はそのとき、哲学者たちが言ういわゆる「他我問題」に目覚めたのか。「他我問題」とは、私が私自身の心あるいは意識を経験するように、他人の心や意識を経験できるわけではないのだから、他人の心あるいは意識をそもそも知ることができるのか、知ることができるとすればどのような認識によつてなのかという、哲学問題である。私はそのような問題の存在に驚いたわけではない。私にとっては、私と同じように他人が、この世界に対して意識を持つてノゾんでいるということは、疑いの対象ではない。しかし多分私とは少し異なる意識を持つて。私には、私自身の意識の確実性や直接性が、自分自身にとって最も重要で確実なく、他人がそのような意識を持てるのかという問いははじめから問題ではなかつた。他人は私と同じようにこの世に存在する、しかし多分私とは少し異なる意識を持つて。私には、私自身の意識の確実性や直接性が、自分自身にとって最も重要で確実な事柄であつて、他人の意識は、この自分の存在からしか理解できないという考えが浮かんだことは一度もない。もちろん私は、私に今現在わき起こつてゐる感情が、私をどのように変え突き動かすのか、私が持つ望みは将来どのように実現されるのか、といふ私自身についての問題から自由になつたこともない。ただ、哲学問題として、私自身の意識から、他人の意識へと向かわなければならぬということを、考えたことがないのだ。

それでは私には、何が本当の問題であり、驚きであつたのか。
目の前に広がつてゐる世界は、確かに私にとっては私自身の意識においてしか接近できないものではあつても、私の意識の内

部を超えてしまっているもの、私が自分の体験の領域のうちに所有し尽くせないものとしてある。いわば世界は私を超越している。他人が私とこの世界を共有していて、私の所有できない他者の意識に対しても世界が繰り広げられていることは、世界が私を超越していることの最も強力な証明ではないだろうか。私にとって問題だったのは、私自身を超越した世界が、その超越にもかかわらず、意識のもとに現れるということ、私や他者の意識を通して姿を現しているということだった。これは、私自身が謎であるということであるよりは、^A世界が私に現れる、という謎なのである。

ところがもし、世界が私を超越していることについて、第三者的な客観主義の立場をとればどうだろうか。「客観主義」という言葉は哲学的にはかなりアイマインなどころが残っているので、あまり安易に使いたくはないのだが、おおよそのところ、「この世界はどのような人の意識からも独立した、つまり主観的な意味や視点から独立した実在であり、この実在を第三者的にとらえることが可能だ」という立場を表すとしておこう。十七世紀以来の近代科学の自然観、「数学的物理学」の方法によつて接近できるもの以外の事物は存在しない」という物理的な自然主義も、この客観主義の一形態である。こうした客観主義の立場からすれば、世界が超越していて私と他者に共有されていることを説明するのに、いささかの困難もない。例えば、私とあなたが野の道で出会うツツジの赤い花は、地球上のその位置その時刻に人間という生物が花として知覚することを可能にする、何らかの物質として存在し、その物質が特定の（十分な太陽光が与えられているというような）環境の条件のもとで、私たち二人の視覚器官に物理的な刺激を与え、その刺激がほとんど同じような神経回路を持つ私たち二人の脳のなかで、何らかの情報処理を受け、同じような視覚体験を生みだす。

冷静に考えれば、「世界が私に現れる」という驚くべき謎はここでは消滅してしまっているように思える。自然科学は、物質から脳に至る情報伝達の経路と、最終的な視覚の情報処理過程について、解明されるべき具体的な謎を残してはいる。ただし、世界が私を超越し、それでいて私に対して姿を現すということは、謎ではなくすでに当然のように前提にされているわけだ。「私自身を超越した世界が意識のもとに現れる」という謎を、「心は世界にどうつながっているのか」という問題として表現し直すことができるだろう。世界が意識のもとに現れるということを説明するのは、心がどのように世界とつながっているのかを説明

する仕組みである。客観主義の答えによれば、心と世界とのつながりは、物理学的・生物学的な複雑さ以上の、特別な性質を持つことはない。空から降り注ぐスイテキが岩を穿つように、あるいは私の身体が、食物や空気を通じて環境との相互作用をしているように、私の心と世界とは情報の伝達と処理のやりとりを通じて、つながっているのだと。

しかし多くの哲学者たちは、この客観主義の主張する「つながり」なるものに大きな疑問を抱いてきた。世界と物理学的、生物学的な相互作用をする心や意識とは、一体どのようなものなのだろう。それが何か、物質や生物が持つ性質、出来事と同類であるとするなら、心や意識の特徴を本当にとらえたことになるのだろうか。現代においては、近代自然科学の発展を背景にして、心や意識についての客観主義を主張する人々と、心や意識をそのような特徴ではとらえられないという人々が厳しい対立の状態にある。この対立を、近代の客観主義を実現している自然主義と、それに反対する反自然主義の立場の対立と置き換えてもいいだろう。

(中略)

客観主義が提案する心と世界の「つながり」は、世界がそのもとに現れる意識や、心の構造をとらえ損なっているのではないか。

私とあなたが野の道で出会うツツジの赤い花のことを、もう一度考えよう。私とあなたの意識のなかで、ツツジの赤い花が体験されること——第一章で説明する「クオリア」——は、物質や生物が持つ性質・出来事とはまったく異なる種類の性質・出来事であって、客観主義の提案するような「つながり」の一部にはなれそうもない。意識のなかの体験は、物質や生物といった外界の実在あるいは脳の状態とは異なるのであり、このような事実が、心や意識と単なる自然とを区別する。しかし、このように心を世界から切り離してその尊厳を守れたとしても、「心は世界にどうつながっているのか」という問題はむしろ遠ざけられてしまつている。^注 フッサールの初期から中期の思考法を論ずるこの本の以下の議論は、「真理」によつて心は世界とつながっているという発想に着目する。

え、真理？　とびっくりする読者もおられるかもしない。「私自身を超越した世界が意識のもとに現れる」という謎を解こうとするフッサールが、意識や変化する現実を超えた「真理」の概念に訴えなくてはならないのは奇妙であるし、この「真理」の概念

こそ、客観主義を生みだした元凶ではないのか。確かに、「真理」の概念に向けられた批判は容赦がない。「私は真理について証^{あかし}をするためにこの世にきた」というイエスに対し、「真理とは何か?」と問い合わせたローマ総督ピラトのように、真理を「真理」という名詞が指し示す絶対的真実在だとみなす態度への懷疑は根強くある。そして私自身もその懷疑を共有しはするのだが、それによつて「真理」の概念が無意味になつたとは思はない。

私とあなたが野の道でツツジの赤い花と出会つたとき、私たちは自分の意識の内面にある赤い花と触れ合つたのではなく、まさに世界に実在するツツジの赤い花がそこにあることを見た。「そこに見る」とのうちには、「そこにあることを信ずる」ことが含まれるのであり、「信ずる」ことは「あることを真だとみなす」ことに等しい。私たちがツツジの花を見たとき、私たちは同時に、「ツツジの赤い花がそこにある」ことを真であるとみなしたのである。「真であるとみなす」ことが、主観的な勝手な思いこみを指すことがないわけではない。しかしわれわれの生活や学問活動においては、「真であるとみなす」ことは、われわれを世界に向かわせる大切なきびである。私たちは「ツツジの赤い花がそこにある」ことを真であるとみなすからこそ、そこに立ち止まつて今年のツツジの咲き具合について会話を交わすことができるのであり、「赤い花に触つてみて」と命ぜられれば、即座に目の前のツツジに手を伸ばすことができる。

真であるとみなすことは、全幅の信頼を置いて世界に身を任せることである。それは第一に、そこからさまざまな推論的思考を開いていくことができる前提として機能し、さらには他人との会話において、真であることを正当化しなければならない自分の主張として、あるいはその根拠を問いただし批判しなければならない相手の主張として現れてくる。「ツツジの赤い花がそこにある」というような知覚に関する主張では、このことは分かりにくいが、「日本は第二次世界大戦についての戦争責任を果たしていない」という主張は、例えば、「戦争責任を果たした国だけが近隣の国家の信頼を勝ち得る」という主張と一緒に前提として機能して、「日本は近隣国家の信頼を勝ち得ていらない」という結論を導く推論を形成する。「日本は第二次世界大戦についての戦争責任を果たしていない」という私の主張それ自体を、正しいものだと弁護しなくてはならない場合もある。どちらの場合でも、私がそのように主張することは、かくかくであることが真であるとみなして、何かを開始することである。」のよう^Cに世界

に身を任せなければ、私たちの生活は單なる想像と疑いの產物になつてしまふのではないか。

真であるとみなすことは第二に、知的な推論的思考の前提となるだけではなく、われわれの行動の不可欠の前提になる。「ツジの赤い花がそこにある」とみなして立ち止まるという先ほどの例がそうであろう。また私が、「日本は第二次世界大戦についての戦争責任を果たしていない」を真であるとみなすことは、「自國が戦争責任を果たすよう行動することが、国民の義務だ」という行動指針と一緒になつて、戦争責任を追及する市民運動へと私^(オ)を力り立てるかもしれない。

心と世界が「真理」を通してつながつてゐるということの意味は、神のごとき絶対者が存在して、私たちの意識と世界とのあいだを取り持つてくれているなどということではない。われわれは客觀主義者の言うように、物としての世界に物として對峙することによつて世界とつながるのでなく、「真であるとみなす」ことを通じて、世界をシリアルスに受け止め、そこに身を任せるという仕方で、世界とつながつてゐるのだ。だがこのつながりは、繰り返しになるが、主觀の側の勝手な思いこみを世界にぶつけたこととも違う。世界は、決してわれわれの自由にならないもの、「真であるとみなす」ことがそれに従わざるをえないものとして出現する。「ツジの赤い花がそこにある」という主張は、現に目にしてゐる知覚された事實についてのものであるから、たいていは真であるが、しかし偽となる可能性を免れるわけにはいかない。真であるか、偽であるかは、われわれ自身が決定できることではなく、世界の方からその決め方もろともやつてくることなのだ。

(中略)

哲学の立場からにせよ自然科学の立場からにせよ、近年の心の探究において最も注目されている心の特性は、体験の主觀的な質としての「クオリア」——「感覺質」と訳されることが多い——である。私が海辺に出るとき、街のなかでは予期していなかつたような眩^(まばゆ)い光が私の視野を被^(おお)い、むせかえるような汐^(しお)の香りが私の嗅^(きゅう)覚^(かく)を満たし、言葉にできないような解放感で私の胸はいっぱいになることがある。このような光の体験、香りの感覺、解放感という感覺あるいは感情がクオリアである。クオリアが注目されているのは、それが自然科学によつて探究されている物理学的な事実と説明に、どうしても回収できない抵抗を示しているからである。私が海辺で体験した光の眩しさは、私の心のなかにある主觀的な質であり、心の外に広がつてゐる實在的な世

界や私の脳内の感覺野の物理的出来事とはまったく異なつたものではないのか。私が体験する光の眩しさは、私の目に達する特定の波長の電磁波それ自体ではないし、その電磁波からの刺激を処理している脳のはたらきでもない。眩しさは、私の意識における体験としてしか存在しない。

(中略)

人間の心の特性として、クオリアと並んでもう一つ重要なのは、「志向性」と呼ばれる心のあり方である。海辺に出た私の心のあり方は、私だけが体験できる意識内容を持つということに限られるだろうか。もちろんそうではないだろう。私は私の心のなかに閉じこめられているわけではない。私は一緒に海辺に出た友人と、海辺の光景を共有しているのであるから、海辺の光景について会話を交わすことができる。「海辺は眩しすぎる。光の射さないところへ移ろう」などというように。「海辺は眩しすぎる」と私が話し、友人がそれにうなずいて一緒にその場を立ち去るをするとき、私と友人は海辺は眩しすぎるという状況を共有した。「海辺は眩しすぎる」ことを私たちが本当だとみなし、それに基づいて何か行為をなそうとしたのである。

あることを本当だとみなすこと、あることを「信ずること」は、心のうちで意識体験を持つというクオリアとは根本的に異なる心のあり方であり、志向性の一種だとされる。現代哲学では、この心のはたらきを「信念(belief)」と呼ぶけれど、英語の哲学的術語を翻訳したこの言葉遣いは、日本語の語感を頼りにする限り誤解を招くかもしれない。日本語で「信念を持った人」と言えば、自分なりの原則を貫く人という意味であり、ただ何かを本当だとみなすこととはズレている。この点に用心しながら、何かを本当だとみなすことという意味で、この本では「信念」という言葉を使用することにしよう。

信念に代表されるような志向性には、クオリアとは異なつた二つの重要な特徴がある。

第一の特徴は、志向性が意識の内部にとどまらずに、意識の外部あるいは世界に向かっていふことである。世界に向かっているといつても、それは隕石が物理法則に従つて地球に衝突してくるというようにではない。「海辺は眩しすぎる」ことを本当だとみなすという意味で、私が信念を持つとき、私は物理法則に従うように世界に向かつて運動しているわけではない。しかし、世界のなかの何かを本当だとみなすことは、私が行動を起こしたり何か行動への意志を持つことを生みだすためにどうしても必要

なのではないだろうか。私は、海辺が眩しいので光の射きないところへ移るという行動を、「海辺が眩しすぎる」とを本当だとみなさない限り決してなきないだろう。

心の志向性が世界へ向かつていくことと、物理法則に従つて何かが何かに向かつていくことの違いを、もう少し分かりやすく説明できるだろう。例えば私が、カルト的な宗教にはまつてしまつて、「教祖Xの予言はすべて実現する」という信念を持つたとしてみよう。私は教祖の予言を聞いて「一年後に日本列島は沈没する」という信念を持つかもしれない。私はこの信念によつて、「一年後に日本列島は沈没する」ということが本当だとみなすのだから、生き残りたいと真剣に考えているなら、教祖とともに日本脱出の計画に参加するという行動をとるだろう。だが「一年後に日本列島は沈没する」ということはとても本当ではありそうにない。人間は本当ではないことでも、それを本当だとみなすことで行動を起こすことができる。そのような意味で心が世界へ向かつていくあり方は、隕石が地球に向かつて衝突していくあり方とは違う。隕石と地球はお互いに世界のなかの実在物でなければ決してそのような「向かつていく」関係をとることはできないが、人間の信念は、本当ではないかもしけないこと、実在しないことにも向かつていくことができるのだ。

今述べたことから、志向性の第二の特徴が見えてくる。志向性は意識の内部にとどまつた性質ではなく世界へと向かつていく心のあり方だが、そのとき世界は(信念の場合なら)本当にそうだとみなされた通りの現実であることも、みなされた通りの現実ではないこともあります。「一年後に日本列島は沈没する」とは、現実かもしれないし、そうではないかもしないという二つの可能性を持つ。信念の持つこのような特徴を、「充足条件」という考え方を使って説明できるだろう。「一年後に日本列島は沈没する」という信念は、一年後に日本列島が本当に沈没するなら、その内容通りだという意味で充足するし、そうでなければ充足されない。いずれの場合でも、信念を持つことは、世界がどのようになつていればその信念のみなす内容の通りであるのかといふ、「充足」の条件を世界へと投げかけることによって、世界へと向かうのである。

D 志向性の二つの特徴は、信念だけではなく、行為の原動力となる欲求や意志、何かが実現されることを希望すること、あるいは何かを愛することのようなさまざまな心のあり方にも、共通するものである。私は、「一年後に日本列島は沈没する」ことが本

当であるとみなすこともできるし、——ずいぶんと悪魔的ではあるが——本当にそうであることを欲求する」ともできる。そして欲求のような志向性においては、欲求されたことが現実になることも、そうでないこともあるわけである。

E 心という特別な存在として世界のなかで私たちが生きていくことを、より適切に表現しているのは、「クオリア」と「志向性」のどちらの特徴であろうか。私は「志向性」の方だと考える。心のなかの体験が、宇宙において独特なもので、物理的世界とはまったく異なつたあり方をするものだということを、無視したいのではない。しかし、世界へと向かっていく志向性の存在を心から切り離して、心のなかの、体験のかけがえのない存在としてのクオリアにだけ注目するなら、クオリアの現れる領域は、世界から切り離された孤島としての意味しか持たなくなるのではないか。哲学者たちがするように海辺の眩しさをかけがえのない体験として、それだけでとらえて、私たちが海辺の光景へと向かっていく志向性を切り離すことができるのは、私たちのふつうの生活が停滞し心のなかへと私たちの関心が内向していくときだけでしかないのか。そして、このような内面へと向かう態度は、人生のきわめて例外的な局面なのではないか。

先ほどの例で見たように、「海辺は眩しすぎる」と私が話し、友人がそれにうなづいて一緒にその場を立ち去ろうとするとき、私は友人は「海辺は眩しすぎる」という信念を持つことによって海辺は眩しすぎるという状況を共有した。単に眩しい体験が個別の心のなかで起こつただけではなく、世界が本当にこうなのだとみなすことで、私たちは世界で何事かをなすことができる。私たちが世界で何事かをなすときに、信念一つだけが心に抱かれているということなど、もちろんありえない。「眩しすぎない光の射さない」ところのある方角についてや、そこへどのように行けばいいのか、についての信念を持たなければ私たちは歩き始めることができないであろうし、「その場を立ち去る」という欲求が私たちを行為に向かわせる。

(門脇俊介『フッサール 心は世界にどうつながっているのか』により一部改変)

注 フッサール——ドイツの哲学者。現象学の創始者。

問一 二重傍線部(ア～オ)のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部Aについて、「世界が私に現れる」の内容を四〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部Bについて、哲学者たちは、なぜ客観主義の主張する「つながり」に疑問を抱いてきたのか、四〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部Cについて、「真であるとみなす」とが、どのようにわれわれを世界に向かわせるのか、七〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部D「志向性の二つの特徴は、信念だけではなく……さまざま心のあり方にも、共通するものである」とあるが、その中の「希望すること」について、自ら考えた具体例を挙げて、「二つの特徴」を明らかにしつつ、九〇字程度で述べなさい。

問六 傍線部Eについて、なぜ「私は「志向性」の方だと考える」のか、一〇〇字以内で述べなさい。

二 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。なお、この文章は室町時代の歌人・正徹による紀行文の一部である。

足近あしきか・及おゆみなども、おなじやうに越え過ぎぬ。黒田といふ所に、いにしへ嬰子みどりこのほどよりはぐくみし人の、今はまことの親のよすがにてありと聞きし、道よりもたづ(a)ぬべき所、人に問ひなどして案内したるに、かぎりなく聞き喜びつつ、さるは親めく人も都にあるほどなりしを、若き心にとかくいたはり慰めなどしつつありふるに、たづき出できぬる心地して、都の物語などしつつ、明け暮し侍りしもあはれなり。

かくてやうやう卯月になりぬ。この所のさま、前も後も田の面にて、林は軒近く、いささ群竹(b)めぐれり。民の家所々、萱(c)が軒、蘆(d)の垣(e)ほさへ、さながら夏麻(f)の陰に隠され、蓬・葎(g)に門を閉ぢたり。都より東(h)へ行きかふ旅人の過ぐる堤の道も、ただこの垣ほのほかなれば、群がり通る駒の足音も、物騒がしきをりもあるべし。早稻田におり立つ田子の、声々にうたひ、夜は蛙の耳かしがましきなど、珍しき心地(b)ぞせし。庭の木下に卯花(i)のほのかに咲きたるを、

A 夜もすがら光は見せよむば玉の黒田の里に咲ける卯花

墨染の黒田の早苗とる賤(j)の夕をかけて袖濡らすらむ

この所は、古き歌枕などにもよめる歌見えず。黒田川はあれども、美濃の国とかや、たづぬべし。

都の風の便りに、こなたかなたより文などことづて侍りし。あはれしるばかりの歌などもありしかども、わざと書き入れず。

つれづれなるままに、近き寺におはします地蔵に参り、老僧の昔物語するなどに語らひよりて日を暮すを、この頼もし人と思ひつる宿守さへ、とみのこととて京へのぼりにしかば、すべて知る人もなし。

(中略)

正面の東の間に、心静かに念誦し居たるに、年の齢六十年に近かるらんと見ゆる翁姿の、髪・髭白く、いたく唐めきたるが、高麗の白き衣に、黄なる帽子引き入れて、末二股なる鹿杖(k)にかかりつつ、庭の灯籠のもとに立ちて、ふし拌むあり。このあたりにては、見ならはず、あやしう、唐土人などにやと思ひながら、念誦しはてて、御堂よりおりて、なにとなく歩み近付きて見れ

ば、都にてたびたび逢ひ奉りし優婆塞うばそく^(注⑥)なり。宗旨の心をし深く、所々参禅の年久しくして、一心の本源明らかにとかや。今たがひに手を打ちて大笑す。

「さるにても、いかにしてここにはいりますにか」と問ひ給ふに、都を浮れ出でしやう、あらあら答ふ。「鄙の住居のならはずしてはいかにしてか」など、なのめならずとぶらひ給ふに、かつ嬉しき心地す。ここにてこと尽べべうもあらざれば、この旅の宿りに誘ひつつ帰りきて、語らひ暮す。

されども、つたなき身のありさま、もとより学せざれば、一文に通ぜず。道心なければ、一句の法文注(8)の心をうかがひ知ることもなし。ただ一向に世上せじやう^Dの物語のみして、今宵は枕を並べていたづらに臥ふしぬ。いかばかり、かの心にも慚愧ざんきありけむと、恥づかしかりき。

(『なぐさみ草』による)

注 ① 足近・及——地名。 ② いささ群竹——小さな竹の茂み。神聖な竹の林の意であるとする説もある。

③ 夏麻——丈高く成長した麻。 ④ 蓬・葎——「蓬」はキク科の多年草。ヨモギ。「葎」は繁茂した雑草のこと。

⑤ 卯花——ウツギ。初夏に白い花を咲かせる。

⑥ 優婆塞——在家のまま仏門に入つて修行する男性。

⑦ 一心の本源明らかに——この場合は、禪に関する根源的な理解力があるということ。

⑧ 道心——仏道に帰依し信仰する心。 ⑨ 法文——仏法を説いた文章。

問一 二重傍線部(a)～(d)について、それぞれ文法的に説明しなさい。

問二 傍線部Aについて、何のどのような様子を「見せよ」というのか、和歌に即して説明しなさい。

問三 傍線部B・Cを現代語訳しなさい。

問四 傍線部Dについて、誰のどのような心情を読み取ることができるか、文脈をふまえて説明しなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。ただし、設問の都合上、送り仮名を省いたところがある。

晋平公浮西河中流而歎曰「嗟乎安得下賢士与共此樂」
者。^(ア) 船人固桑進対曰「君言過矣夫劍產于越珠產于江漢玉產于昆山。此三宝者皆無足而至。今君苟好士則賢士至矣。」平
公曰「固桑來吾門下食客者二千余人朝食不足暮收市租。」
暮食不足朝収市租吾尚可謂不喜好士乎。」固桑対曰「今夫鴻鵠高飛沖天然其所恃者六翮耳。夫腹下之毳背上之毛、
增去一一把飛不為高下不知君之食客二千余人六翮邪、將
腹背之毳也。」平公默然而不應焉。
(1) 増去スルモ
(2) 注(9)
(3) 注(3)
(4) 注(4)
(5) 注(5)
(6) 注(6)
(7) 注(7)
(8) 注(8)
(9) トシテ

(『新序』による)

注

① 西河——黄河の中流辺りの地名。

② 固桑——人名。

③ 于越・江漢・昆山——地名。「于越」は今の浙江省の辺り、「江漢」は長江と漢水、「昆山」は崑崙山の略称。

④ 収市租——市場から税を取り立てる。

⑤ 鴻鵠——大きな鳥の名。

⑥ 沖天——天にまで飛び上がる。

⑦ 六翮——鳥の一対の翼をいう。「翮」は羽の軸。

⑧ 麝——鳥の腹の柔らかい毛。

⑨ 一把——一握り。

問一 二重傍線部(a)・(b)を、送り仮名も含めてすべて平仮名で書き下しなさい。現代仮名遣いでもよい。

問二 波線部(ア)について、「此楽」の指すものを明らかにしながら現代語訳しなさい。

問三 傍線部Aについて、「三宝(劍・珠・玉)」が「足無くして至る」とあるが、固桑はこの比喩で平公に何を訴えたかったのか、

四〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部Bをすべて平仮名で訓読しなさい。現代仮名遣いでもよい。

問五 波線部(イ)を現代語訳しなさい。

問六 傍線部Cについて、平公が「黙然而不應焉」であったのはなぜか、七〇字程度で説明しなさい。